本屋や新聞書評欄で見かけた新刊の新書

2025.5.25 1/2

守屋

書名	著者	出版社	刊行年月	内容概略
サステナビリティの経済哲学	松島 斉	岩波新書	2024年8月	ゲーム理論と情報の経済学を用いて、利己的動機や評判の形成といったアプローチのドグマをあばき、持続可能な新しい経済システムを構想する。
歴史学はこう考える	松田裕作	ちくま新書	2024年9月	史料とはなにか。それをどう読んでいるのか。そこからオリジナルな議論をいかに組み立てるのか。歴史について語る前に、最低限知っておきたい考え方を解説する。
介護格差	結城康博	岩波新書	2024年9月	経済、医療・健康、情報、地域、親類・縁者、世代間、意識の7つをキーワードとして、介護保険の実態や課題をあますところなく解説。
インターネット文明	村井純	岩波新書	2024年9月	インターネットは、趣味や仕事から医療や安全保障までを包摂するひとつの「文明」と化した。そこにはどのような人類史的な課題や使命があるのか。
蔦屋重三郎	鈴木俊幸	平凡社新書	2024年10月	歌麿、写楽、京伝ら江戸文化のスターたちの作品を巧みに売り出し、江戸文化の最先端を演出・創造した版元「蔦重」こと蔦屋重三郎(1750-97)の伝記
蔦屋重三郎 江戸の編集した男	田中優子	文春新書	2024年10月	吉原を振り出しに、幕府の取り締まりをかいくぐりながら、才人鬼才を発掘、歌麿・写楽を世に出した「蔦重」を通して、江戸文化とは何かを再考
ホワイトカラー消滅	冨山和彦	NHK出版新書	2024年10月	少子高齢化・デジタル化の進行で、人手不足はローカル産業で、人余りはグローバル産業で起こり、従来の思考のホワイトカラーには生き残る道はない
就職氷河期世代	近藤絢子	中公新書	2024年10月	1993～2004に高校、大学などを卒業した人々を「就職氷河期世代」と定義し、長期の不況がこの世代の人生に与えた影響について検討し、セーフティネットの拡充を提言
論理的思考とは何か	渡邉雅子	岩波新書	2024年10月	論理学・レトリック・科学・哲学の推論の型とその目的を押さえ、価値に紐付けられた四つの思考法(経済・政治・法技術・社会)を使い分ける、多元的思考を説く。
教員不足	佐久間亜紀	岩波新書	2024年11月	少子化にもかかわらず、事態が深刻化するのはなぜか。過密化する業務、増大する非正規、軽視される専門性など、問題の本質を独自調査で追究。
入門シュンペーター	中野剛志	PHP新書	2024年11月	約00年前にイノベーションの意義を見出したシュンペーター。彼の理論が今日の資本主義の本質を理解するうえできわめて有効なことを明らかにする。
生成AIと脳	池谷裕二	扶桑社新書	2024年11月	AIなくして成立しない世界が訪れたとしても、人が愚かになることは決してない。人間にはAIができない能力があり、その価値は失われない。
死の瞬間	春日武彦	朝日新書	2024年11月	無頓着に記号のように訪れる「死」。「死」に対して崇高な気持ちと悪趣味な情動で揺れ動く、人のふしぎな心の有りように迫る。
蔦屋重三郎と浮世絵	松嶋雅人	NHK出版新書	2024年12月	数多ある版元の中で、なぜ蔦重だけがこれほど注目を集めたのか。話題を呼ぶ浮世絵を次々に手掛け、江戸を騒がせた蔦重の独自の仕掛けとは。
ピーター・ドラッカー	井坂康志	岩波新書	2024年12月	全体主義を批判し、企業とそこで働く自由な人間に未来への可能性を見出したドラッカー。彼の晩年を知る著者が「マネジメントの父」に新たな光を当てる。
グローバルサウスの時代	脇祐三	光文社新書	2024年12月	欧米側にも中ロ側にも与せず、大国間の綱引きの状況を利用して、自国の安全保障と経済的な利益を確保しようとする彼らは一体どんな思考体系と行動原理を持つのか
睡眠の起源	金谷啓之	講談社現代新書	2024年12月	生物は「脳を休めるために眠る」と考えられてきた。それは本当なのだろうか。しかし脳を持たないヒドラも眠るという。眠りの世界から見えてくる生物進化の不思議
日米首脳会談	山口航	中公新書	2024年12月	トップ同士の会談や人間関係は何を生み出してきたのか。米国14人、日本28人の首脳による150回に及ぶ会談を追い、70年以上に渡る日米関係を政治指導者を通して描く

本屋や新聞書評欄で見かけた新刊の新書

シンボルエコノミー	水野和夫	祥伝社新書	2024年12月	古びた理論にしがみつく日本政府や日銀、経営者、そして中世化する日本経済。発想の転換をはかり、世界に先駆けて「定常状態」に向けるにはどうしたらよいか、
東アジア現代史	家近亮子	ちくま新書	2025年1月	日本・中国・朝鮮は鎖国の終焉と共に近代化を迫られた。西洋列強の外圧、植民地化や二度の大戦を経て、劇的な経済発展を達成した歴史を振り返る。
イスラエルの自滅	宮田律	光文社新書	2025年1月	人質救出を名目に「ガザ侵攻」により無辜の人々の命を奪い、戦線を拡大させるイスラエル。彼らの行動原理と目的はどこにあるのか。
ユダヤ人の歴史	鶴見太郎	中公新書	2025年1月	民族離散、移動先での繁栄と迫害、差別。そしてナチスドイツによる絶滅計画を経て、建国。建国後のパレスチナ人追放、中東戦争…。三千年に及ぶ雄大な民族史。
平等について、いま話したいこと	ピケティ/サンデル	早川書房	2025年1月	大いなる格差に覆われる現代。教育やヘルスケアを「脱商品化」するには? 左派はなぜ世界的に弱体化したのか? 当代一の経済学者と政治哲学者が徹底的に議論する。
生成AIで世界はこう変わる	今井翔太	SB新書	2025年1月	生成AIで、どこまでなにができるのか？　私たちの仕事は奪われるのか？　AIで変わる働き方、生活について展望する
日本経済の死角	河野龍太郎	ちくま新書	2025年2月	労働法制、雇用慣行、企業統治、イノベーション。日本経済の長期停滞をよみとく際の「死角」や誤算を白日に晒し、「収奪的システム」から抜け出す方途を明示する。
22世紀の資本主義	成田悠輔	文春新書	2025年2月	人の体も心も商品化される超資本主義の行き着く果てに到来する「測れない経済」。そこに出現する「お金が消えてなくなったデータ資本主義」は人類の福音となるか?
リンカン	紀平英作	岩波新書	2025年2月	南北戦争という分断の危機において、彼はいかにして「人民の共和国」という統合の理念を構想しえたのか。政治的リーダーシップの源泉を問う評伝。
貧困とは何か	志賀信夫	ちくま新書	2025年2月	気鋭の研究者が、「貧困」概念をめぐる議論と問題点を整理し、「貧困」が今もなくならないのはなぜかという根本的な問いに対峙する。
論破という病	倉本圭造	中公新書	2025年2月	自分と異なる意見を持つ相手を敵と認定し、罵りあうだけでは何も解決しない。コミュニケーション不全を乗り越え、対立する色々な立場の間を繋ぐにはどうしたらよいか
沈む祖国を救うには	内田樹	マガジンハウス	2025年3月	拡大する経済格差、税の不均衡、レベルが落ちた教育界など問題が山積する中で、生活に苦しむ国民に手を差し伸べない冷たい国。生き抜くためにどうしたらよいか？
動的平衡は利他に通じる	福岡伸一	朝日新書	2025年3月	生命の基本原理とは、エントロピー排出をもう一度秩序あるものに作り直す互恵的な関係性にある。動的平衡の利他性に着目し、いのちの行く末を考える
数学の言葉で世界を見たら	大栗博司	幻冬舎	2025年3月	足し算・引き算など基礎の基礎から、確率・関数など日常生活で役立つ話、無限世界の驚く話、美しい「式」や「形」の話まで、楽しみながら学べる数学入門
アンパンマンと日本人	柳瀬博一	新潮新書	2025年3月	生みの親やなせたかしの生涯から、ふるさと高知での原体験、従軍と飢餓、肉親との相次ぐ死別など作品への投影を考察、アンパンマンの普遍的魅力と思想を浮き彫りにする
ほんとうの会議	帚木蓬生	講談社現代新書	2025年3月	語りを聞くだけで討論も批判もしないオープンダイアローグこそが真の会議だ。人間を成長させる力を持つこの手法の誕生の背景とやり方について解説。
西洋近代の罪	大澤真幸	朝日新書	2025年4月	トランプとプーチンはたまたま同時代に共存しているのではない。彼らの同時代性には理由がある。トランプは、外交政策的にではなく精神的にプーチンの側にいる——。